

令和五年度 徳島県高等学校教育研究大会（国語学会）発表資料

「連携型中高一貫教育における国語教育の実践について」

徳島県立那賀高等学校国語科

一 本校の概要

本校は、那賀川中流の那賀町に位置し、昨年度創立七十周年を迎えた高校である。那賀町唯一の高校で、現在は各学年三クラス、一七〇名の生徒が在籍している。平成十三年度から始めた那賀地域連携型中高一貫教育は、今年で二十三年目になり、町内三中学校と連携し、中高のつながりを大切にした学習指導やさまざまな教育活動を行っている。本校の約二五％が連携の丹生谷地区三中学校の出身であるものの、地域の少子化に伴い、町外・県外からの生徒も増えている。今年度は、約六〇名の生徒が、本校の単独寮である「若鮎寮」や那賀町所有の「那賀菊寮」、「竜峰寮」から登校している。

本校は、県内唯一、普通科と農業科（森林クリエイト科）が併設されている高校である。総合的な探究の時間や課題研究を通して、将来、林業を始めとする地域産業など、社会に貢献できる力の育成を目指している。

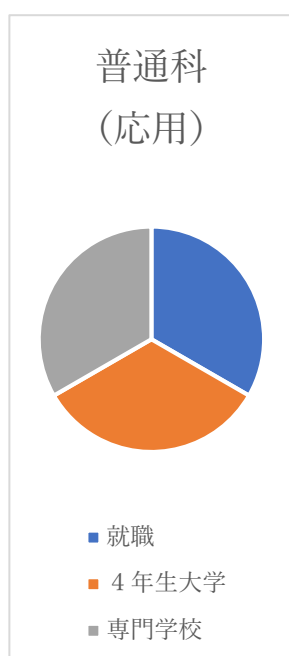
普通科には、進学と就職に対応する「応用」「情報」「福祉」の三つのコースがある。生徒一人一人が自己の可能性を見つけ出し、能力を伸ばし、個性を生かせるよう、二年時からコースを選択して少人数で学習できる環境が整っている。

森林クリエイト科は、平成二八年度に新設された、林業について

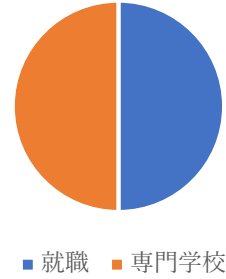
専門的に学ぶことのできる学科である。徳島県の林業振興や地方創生を担う人材育成のため、「フォレストキャンパス那賀」を拠点に、林業事業体と連携し、実践的な学習を行っている。また、「林業のスペシャリスト」となるために必要な大型林業機械やドローン操作などの資格取得にも励んでいる。

小規模校であるため、生徒と教員の結びつきや生徒同士の連帯意識が強く、「協調・研学・誠実」の校訓のもと、生徒一人一人の夢の実現を目指す教育を行っている。

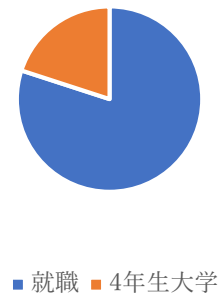
昨年度の卒業生の進路は、就職・進学が半々である。コース別では、普通科応用コースは、大学・専門学校・就職がそれぞれ三分の一、情報・福祉コースは、専門学校進学と就職が半々、森林クリエイト科は、就職が約八割、二割が大学進学である。入学生が多様化が進むとともに、学科・コースごとに進路が多岐に渡るため、個に応じたきめ細やかな進路指導がさらに必要となっている。



普通科 (情・福)



森林クリ エイト科



二 中高一貫教育について

(1) 目的

「丹生谷のこどもは丹生谷で育てよう!」というスローガンのもと、本校は、平成十三年度から本格的に丹生谷地区六中学(統合により、現在は三中学)との中高一貫教育をスタートした。中高のつながりを大切にした学習や部活動で次のような学校生活を目指している。

- ① 中高の教員によるティームティーチングや部活動など、教育活動の中高連携により、懇切できめ細かい指導を行い、一人一人の能力や個性を伸ばす。

- ② 中高が連携し、地域の特色を活かした教育活動を展開すること

で、地域への愛着を育て、幅広い分野でリーダーシップを発揮することのできる人材を育成する。

- ③ 那賀高校では多様な目的意識に対応できるコース制を導入し、自己実現に対する意欲を高め、大学受験や就職、資格取得などへの実力を養う。

(2) 近年のティームティーチング実施状況

(各教科 週に一コマ×二学年)

① 令和二年度

那賀高校より

相生中学校(理科)・鶯敷中学校(国語)・木頭中学校(体育)

那賀高校へ 鶯敷中学校(保健)・相生中学校(美術)

② 令和三年度

那賀高校より

相生中学校(国語)・鶯敷中学校(理科)・木頭中学校(体育)

那賀高校へ 相生中学校(国語)・木頭中学校(社会)

③ 令和四年度

那賀高校より

相生中学校(体育)・鶯敷中学校(国語)・木頭中学校(英語)

那賀高校へ 鶯敷中学校(保健)・木頭中学校(書道)

④ 令和五年度

那賀高校より

相生中学校（国語）・鷺敷中学校（体育）・木頭中学校（農業）
那賀高校へ 相生中学校（体育）・鷺敷中学校（書道）

三 課題

二十三年続く中高連携だが、「中学と高校の双方に生徒に関わった教員がいることで、那賀高入学前後の生徒の状況がわかりやすい」「中学生が高校の教員に高校生活について気軽に質問をすることができる」という声がある一方、ほぼ毎年、年度末のTTに関するアンケートで以下の三つの課題が挙げられる。

（中学校におけるTT教員アンケートより一部抜粋）

① 国語の授業は週三時間だが、TTは週に一時間なので、一つの単元にきちんと関わることができない。

② 毎年、授業を行う中学校や教員が変わり、継続した指導が難しい。

③ 郡内の中学生の人数が減少し続けている上に、多様な進路希望により、那賀高校に入学する生徒の実態が年によって大幅に違う。

ただ、中学校からの要望や高校の教員数の都合により、これらの課題の解消は困難である。一方、本校では、発達障がいのある生徒や小・中学校で不登校であった生徒も一定数入学してくるようになり、今年度から通級制度が導入された。

学力面でいうと、入学時の国語のGTZ（学習到達ゾーン）においてばらつきがあり、クラスの分け方や授業の進め方に相当の工夫が必要になる。そこで、那賀高校国語科では中高連携の授業を通して、

中学校の授業の進め方や生徒のつまずきについて研究することにした。今回は、令和二年度以降の取組について報告する。

四 実践報告

（1）令和二年度 鷺敷中学校にて週一回 二時間

① 基本はT2として机間指導と生徒のフォローをする。また高校での生活全般、学習について、那賀高校についての質問等に答える。

② 授業の初め（五〜十分）で短歌や俳句、季語についての説明をする。

（2）令和三年度 相生中学校にて 週一回 二時間

① 基本はT2として机間指導と生徒のフォローをする。また高校での生活全般、学習について、那賀高校についての質問等に答える。

② 学期に一時間、T1として、授業を行った。

例

中学2年

漢文教材「漢詩」 盛唐の三大詩人の説明と近体詩の説明

（中学校の教科書に載っていないこと＋高校での学習内容を中心に）

中学3年

漢文教材「論語」 孔子を始めとする、中国の思想家について

書き下しと現代語訳の方法

（中学校の教科書に載っていないこと＋高校での学習内容を中心に）

古文教材「奥の細道」 松尾芭蕉の通った道を辿る（調べ学習）

那賀郡中学校国語学会 研究授業一時間含む

(3) 令和四年度 鷺敷中学校にて週一回 二時間

①基本はT2として机間指導と生徒のフォローをする。また高校での生活全般、学習について、那賀高校についての質問等に答える。

②「季節のことば」として、四季折々の季語の説明を行った。

授業最初の十分間で季語の説明・俳句と短歌の解釈を行った。

(中学校の教科書+高校での学習内容を中心に)

中学3年

古文 教材「和歌の世界 君待つと」

万葉集・古今和歌集・新古今和歌集

(中学校の教科書に載っていないこと+高校での学習内容を中心に)

那賀郡中学校国語学会 研究授業1時間含む

(4) 令和三年度 那賀高校にて 週一回 二時間

国語 1年生『国語総合』の授業にT2として入っていただいた。

(5) 令和四年度 那賀高校にて 週一回 二時間

書道 ① 1年・2年の各授業にT2として入っていただいた。

② 教材「手紙の書き方」でT1として授業をしていただいた。

《参考》芸術科「書道」における中高連携授業について

令和四年度は、木頭中学校の国語科の先生にT2として入ってい

ただき、連携授業を週に一度(年間十七回)一年生の2講座で実施した。

また、「集中して一字一字丁寧に書く」ことを目標に、中学校の先生に「手紙の書き方(硬筆)」の授業をT1として実施していただいた。生徒たちは、二年生でインタースhipを実施することになっており、実施後にお礼状を個別に書く。しかし、例年、丁寧に最後まで書くための集中力が続かず、誤字や脱字があり、書き直すことも多い。そこで、一年生からボールペンで文字を書く練習をすることで、普段のノートなどに書く鉛筆やシャープペンとは違った緊張感を持ち、丁寧に最後まで書く姿勢を養っている。

昨年度、連携授業を受けた生徒からは、「中学生の頃と比較すると集中して字が書けるようになった。」や「長い時間続けてできることが多くなった。」という感想も聞かれる。

実践報告Ⅱ

「連携中学校の授業での気づき」を活かした本校授業での取組

(1) 中学校までの習得状況の把握

中学校では習う範囲が決まっているため、高校入学までに生徒がどのような学びをしているのか、使用教材にはどのようなものがある、語句や文法等どこまで教わっているのかがよくわかるようになった。また、同じ作者の作品や、同じ作品を扱っていることを生徒

に伝えることで、中高の教科のつながりや学習の積み重ねを実感させることができる場面も多くあった。

(高校で) ↓高校入学時点において習得できている生徒とそうでない生徒を分けて習熟度クラスを組むことができた。また、習熟度にすることで、少人数での授業が可能になり、GTZでAランクの生徒にも対応できるようになった。

(2) 生徒の実態に合わせた授業の工夫

小説の学習の際、毎時間授業の最初に本文を音読する。一行読みで交代することで、全員が集中して最後まで読むことができる。

↓範読や朗読CDで聞き逃した漢字の読みを生徒自身がもう一度確認できる。漢字が読めない、行をとばしてしまう、という生徒にも一文であれば抵抗が少なく取り組みやすい。例えば、難解語句の多い『山月記』の場合、一時間で学ぶ一段落を、一人二文で交代して読んだ。最後まで緊張感をもって読む、聞くことができた。

古典の教材には、教科書に現代語訳が載っており、本文と現代語訳を交互に読むことで、生徒は話の内容がよくわかる。

↓応用クラスの授業では、本文をノートに書き写し、自分で単語や句法を調べ、自分なりの現代語訳を完成させるよう指導する。

習熟度別クラスでは、書き下し文や現代語訳がほぼ書かれたワークシートを使用した。

(3) 漢字検定

那賀町の補助制度を利用し、クラス全員が受検している。(年に一回全額補助。)授業の最初五分は漢字のワークに取り組む時間を設定。計画表にそって週に一回程度小テストを実施。

↓本校も那賀町の支援を受け、年に一回、受検級に応じて補助金制度がある。本校では、普通科応用コースの生徒は年に一度全員で、他の生徒も希望制で受検している。中学校から受検し続けている中には、高校二年生の段階で二級まで合格する生徒もいる。検定を受けることで語彙が増え、繰り返し学習する習慣が身についている。

(4) 創作活動

「なか文芸」という文芸誌を那賀町が発行しており、小・中・高の生徒や一般の方々の俳句や短歌、作文を掲載している。自分の作品が選ばれ、掲載されることで自信を深める生徒も多く、中学生も高校生も長期休業中の宿題として取り組んでいる。さらに本校では、毎年冬に「伊藤園 おいお茶」にも投句し、第三次選考まで残る生徒も毎年のように出ている。

このように定期的に創作をしているので、今年度は、那賀高生の創った俳句を中学生の「句会を開こう」という単元に利用し、中学生の作品に交えて紹介しようと用意している。また、その句会で選ばれた中学生の作品を今度は高校に持ち帰り、高校生の句会でも取り上げてみたい。那賀地域中高一貫教育進路指導委員会主催の「中高生によるオンライン交流会」等を利用し、連携三中学校と那賀高校

をオンラインでつなぎ、作品の感想を伝えあうことも考えている。教員の交流だけで終わるのではなく、生徒同士が作品を通じて交流し、それぞれの感性や持ち味の面白さを実感し、互いに興味をもてるような空間づくりをしていくことで、また新たなつながりができるのではないだろうか。

五

(1) アンケートより

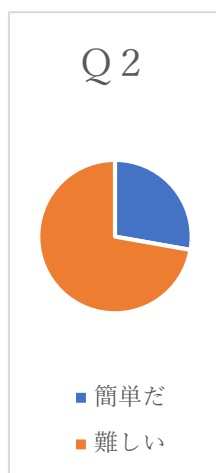
Q 高校進学後の感想

- ・よかった。
- ・学校生活が楽しい。
- ・自分のペースで勉強ができ、先生たちが親身になってくれるのでとてもよい環境で勉強ができているなと思う。
- ・地元の学校に入れてよかった。
- ・学校生活が楽しみ。
- ・自分の進路に合う勉強方法を教えてくれ、いろいろ助かっている。
- ・授業はそこまで難しくない。
- ・大学を目指して野球も頑張りたいから。
- ・友達と仲良くできている。
- ・楽しい学校。仲がよい。
- ・新しい友達と一緒に勉強や部活動ができてうれしい。

- ・勉強がわかりやすい。

【課題】

Q2 高校の国語の授業について



簡単だ 五人

- ・もともと国語が得意だから。
- ・わかりやすい。
- ・国語を学ぶときにマイナスな感情になっていないから
- ・苦手分野以外は大丈夫。
- ・文系がけっこう得意だから。

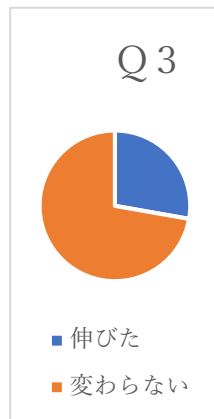
難しい 十三人

- ・物語の内容が難しくなってきたいて、本を読むのが苦手だから内容が理解できないときもある。
- ・国語が2教科に分かれて、しかも中学とは問い方が全く違うから。

- ・読みが苦手だから
- ・問題も文字も多いから。
- ・覚えることが多い。
- ・言語文化の古典が難しい。
- ・新しく習うことが多くなってきたから。
- ・内容が難しいから。
- ・苦手分野があるから。

○3 高校で国語の力が伸びたと思いますか？

伸びた 五人 変わらない 十三人



高校の授業が簡単だと答えた生徒は全体の二七パーセントで、もとと国語が得意であることが多く、生徒の七割は、国語の学力が伸びたという実感はまだもてていないようである。

連携中学からの生徒は、生徒の三年間での模試の結果の推移を見ると、G T ZがCからBへ、そしてBからAに上昇している生徒が

半数近くいる。授業に取り組む雰囲気も真剣で、周囲に良い影響を与えているように感じられる。また、学年全体のDの割合もわずかなが減少した。

六 まとめ

連携中学校の生徒の中には、中学時代には目立たなかった生徒も多いが、高校入学後、成績の向上とともにめざましい活躍を見せることがよくある。例えば、運動部、文化部の活動に活発に取り組み、文武両道を実践してみせる生徒。防災クラブ、エシカルクラブなど、校外へ活動の幅を広げる生徒。中学時代は登校できなかった生徒が生徒会役員に立候補し、学校の中心となる様子も見られた。また、特別な支援が必要な生徒の中にも、学習成績やコミュニケーション能力が向上し、自信をもって行動し始める生徒もいる。

「丹生谷の子どもは丹生谷で育てよう！」というスローガンのもとで始まった中高連携。そこでリーダーとして育った子どもたちが郡外・県外からの多様な入学生に刺激を与え、引っ張っていきける存在となっていけるよう、今後も力を尽くしていきたいと考えている。

